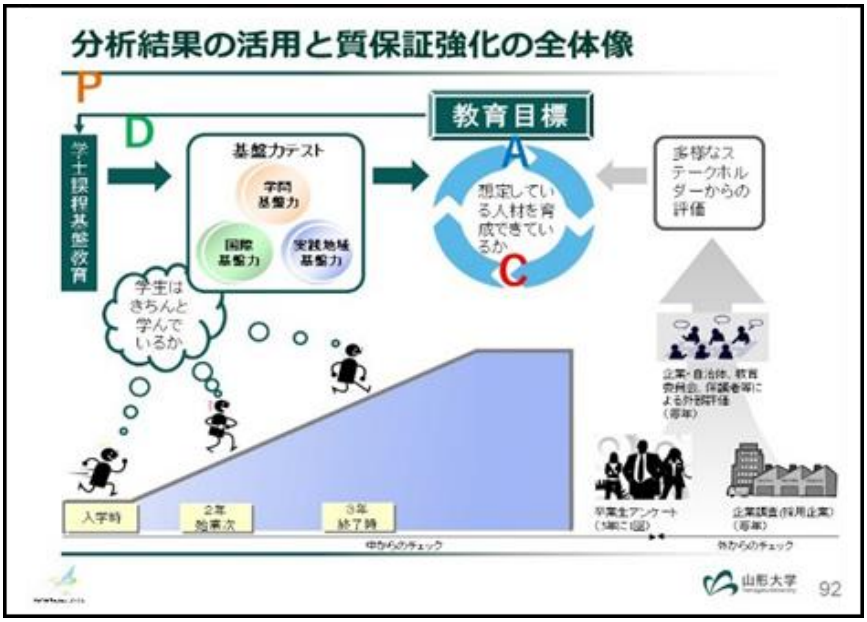
＜基盤力テストの今後の展望＞

〇千代教授

お待たせして申し訳ありません。山形大学の千代と申します。よろしくお願いします。私もちょっとふわふわした話というか、将来の話ということで、少し今後の展望ですね。話させていただこうかと思います。



分析結果、ここまで様々な学問基盤力、それから実践地域基盤力、そして国際基盤力という形で出してきました。これをどういう形で大学の教育の質保証につなげていくかというところですけれども、これは先ほどお話にもずっと出てきましたけども、教育目標、特に大学の DP ですね。ディプロマ・ポリシーというものが存在して、そこに対して正しく大学教育が向かっているかというところの評価になっています。

ただ先ほどもずっと教育プログラムの D、A、E ですかね――の話もありましたけども、必ずしも基盤力テストというのは、その学部学科の教育目標そのものを体現しているわけではなくて、広い範囲で、より広い範囲で見ています。そういうことでもありまして、必ずしもすべての科目がそのプログラム毎に上がるというわけではありません。逆にそのプログラムにおいて将来的にどういうふうな教育が必要になる、若しくはどういうふうな人物像が必要になるのかということがあったときに、じゃあここはこの学部についてこの授

業を増やせばいいんじゃないかということが分かってくる。若しくはここは減らしてもいいんじゃないかということが分かってくるという意味で、様々な授業に関連してテストを行っているということになります。

これは、先ほどの実践基盤力の５因子調査についても全く同じで、みんながパーフェクトに点数を上げる必要というのは実はなくて、それぞれが得意なところを受け持って、若しくは必要なところを伸ばしていければそれで良いということになります。なので、こういう形で基盤力テストというものを実施していくことによって、大学の教育について、きちっと我々が期待しているような設計というのは、まだ早いかもしれないんですけれども、少なくとも大学として、育てたい人物像というのに近づいていくのかということを、こういうふうな形で、１年次・２年次・３年次、そして卒業という形で、坂を上っていっているのかというところを見ていくということになります。

必ずしも学生さんそのものが、自分で達成できたということがはっきり言えるかどうか、というのは分からないとしても、じゃあその他のステークホルダーですね。例えばそれこそ保護者であったり、企業であったり、若しくは地域の住民の方だったり、若しくは学生さんにとっての未来の自分が振り返ったときに、どれだけ到達できたのかということが、きちっと言える。それが一つの外部質保証につながっていくというふうに考えています。なので、もちろんその４年卒業して、学生さんがどれぐらい伸びたかというのは、４年間でその最後の段階できちっと分かるかというとそうではないのかもしれないんですけれども、まず４年間通して３回テストをやる。そして大学の外からの質保証という形で、ステークホルダーの意見を聞くということをやって、初めてぼくらが期待しているような学生さんに育ってきているのかということをやるということです。

というふうなきれいな話をするんですけれども、実はぼくは、この絵はあまり好きじゃなくて、というのは何かここがベルトコンベアーになって、サバの缶詰がずっとこう移動していって、ここで完成品になっているというような、そういう非常に良くない印象を実は持っていて、ここまでやった上で、ここにどれぐらい意味があるのかという話を本来するべきだと思っています。ここですね。この辺りですね。既にお話もあったかと思うんですけれども、データを持っていく。学生さんの到達度を学生自身が見ている。見てもらう。そして もちろんこれについては、学生さんが保護者であったり、他の人に見てもらいたいのであれば、それをディプロマ・サプリメント、若しくはポートフォリオとして提示していただくと思います。

我々としては、こういうふうな統計データから授業のあり方だったり、学生さんの生活であったり、そういうことも含めて、なるべく学生さんの成功ですね。スチューデントサクセスにつなげていくというふうなことを考えている。ここまでは必ずほぼやっていかないといけないというふうになってくると思います。データとしてはこういうものもありま

すし、取れるものについては取るということになります。ただ、先ほどからも強調しているんですけれども、これが学生の、若しくは大学を含めたすべての側面をきれいに出しているかというと必ずしもそうじゃないです。もちろん将来的にもそういうことができるかと言うと、多分できないと思います。これは大学教員としてもそうですし、先生方も多分、感覚的にもお分かりだと思うんですけれども、常に大学教育がどれだけ意味があるのかというときに、エビデンスを出すという部分と、いや何となくでも分かるよね。将来役に立つじゃない。みんなそう思うでしょう。
という感覚的な部分と二つあると思うんですよね。それを切り分けて出せる部分は出す。そうではない部分ですね。平野室長もおっしゃっていたと思うんですけれども、出せる部分は出す。出せない部分についても、なるべく説得力を持った形で、共感を持ってもらうと。これは学生さんもそうですし、他のステークホルダーもそうなんですけれども、そういう形で、この教育改革、若しくは質保証という部分を続けていく必要があるかなと思います。今後なんですけれども、テストの継続的な実施、これはもう実際作っていますので、自動的に転がっていくというふうな感じになるかと思います。

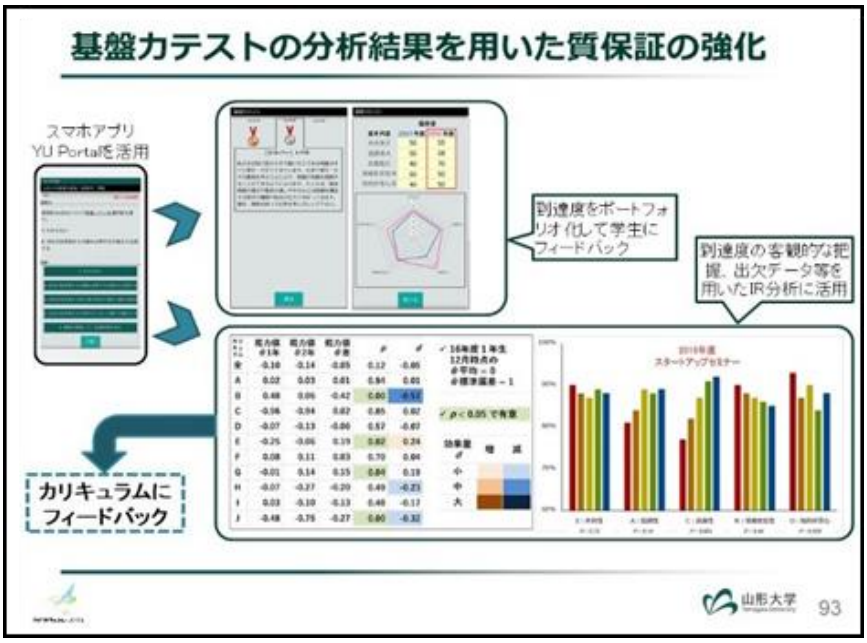
独自テストの開発ということで、先ほど浅野先生からもありましたけれども、英語の語彙力であったり、あとほかの科目も少しいじっている部分があります。そして国際基盤力については、先ほどちょっとありましたけれども、まだやることがいろいろ溜まっていますので、そこの部分をもう少しいろんな大学であったり、取組や調査することによって評価していくことになるか、実施していくことになるのかなと思っています。この辺り近い将来と言いますか、もう今日からでも続けていく部分になるかと思います。３年生のテストについては、基本的に全学部でやはり実施することになっていますけれども、学部によって３年生の中盤であったり、３年生の終わりであったり、４年生の半ばであったりということで、ちょっと差がありますので、今回は一部の部分だけお見せすることになりました。

もう一つなんですけれども、さらに今後、これは藤原先生が積極的に見せていただいたと思うんですけれども、かなりデータの分析、プラットフォームというのも充実してきています。今までは藤原先生、若しくはIR担当者が分析して、それを我々が考えたり、評価したり、検証したりというところがあったんですけれども、今後ですね、先ほど改革をしているという話もありましたけれども、そういうふうに各学部の教育担当者、若しくは教育委員会の中で、様々な分析を自分たちで行うことによって、あとは入試戦略であったり、あと卒業後の追跡調査と組み合わせたりということで、IRの分析ということができるようになってきました。私も１年生の教育に関しては、そのようなデータを使って様々な分析をしています。これまでは成績データしか見れなかったので、何でこの授業は60点のところにリーフが立ってるのかなとか、そういうことをいろいろ思うことあったんです

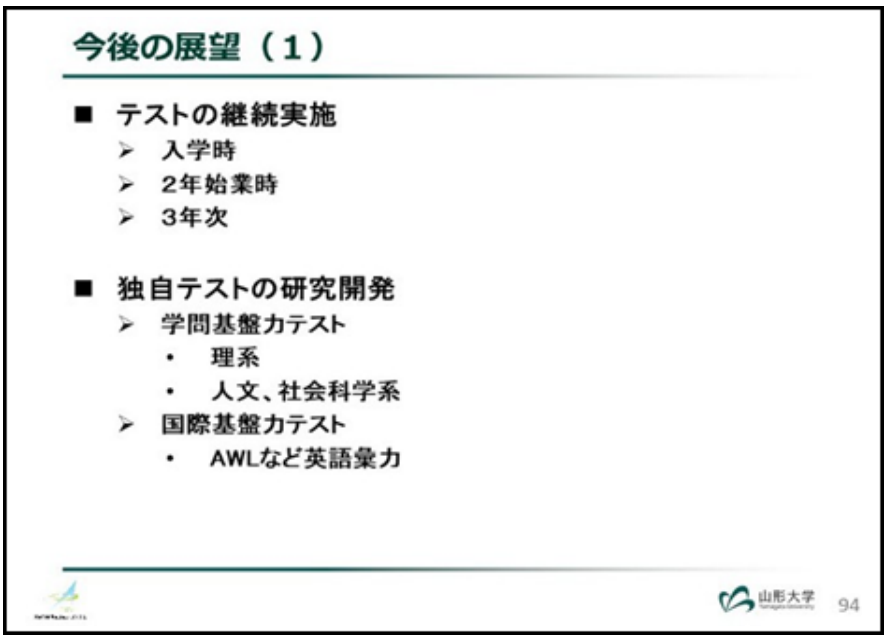
けれども、さらに複雑な分析を仮説検証することができるようになってきたかなというふうに感じています。

ほかに、実は今日お見せしていないデータというのもたくさんあります。例えばですね、生活収入に限らず学生の授業外学習時間というのをかなりたくさん既に取っていますし、先ほどちょっと軽く言及しましたけれども、卒業生の追跡調査であったり、企業の企業調査ですね。山形大学の学生を受け入れた企業へのアンケート結果、満足度調査であったり、そういうものについて様々なデータがあります。そうすることによって、先ほどの入試データも含めて、入口から出口までと、その先までということで、学生さんがどれだけ伸びているか。山形大学の寄与というのはどれぐらいあるのかというのを調べることができます。ただ正直なところ、こういう部分というのはアメリカの大学かなり進んでいるので、日本ではまだまだできないことがたくさんあるんですけれども、今後もう少し学生さんの卒業以降も含めて、山形大学どれだけ教育効果あるのかというところを、エビデンスを出しているというところをもう少し見せていければと思っています。

このような結果をいろいろ集めてくることによって、学生へのフィードバックということも可能になります。例えば企業がどういうところを、山形大学の学生を評価しているのかであるとか、どういう授業を受けることによって、学生さんがどういうふうに伸びていくのかということ自体も、学生さんにフィードバックできますし、学生個人にとっても、先ほどお見せしましたような、ポートフォリオを整理したようなディプロマ・サプリメントを、卒業時であったり、卒業前ももちろんそうですけれども、電子化したことによって、随時見ることができるということになります。



質保証という観点ですけれども、これが先ほど浅野先生からもありましたけれども、カリキュラム・マッピングを丁寧に行うことができるようになりました。つまり授業の中でカリキュラムの整理を行ったり、基盤力テストの結果を使って、プログラムを改修したり修正したりということが可能になります。そのようなことを、これは基盤といった１年生のデータだけではなくて、学部レベルでも資料化することができると。

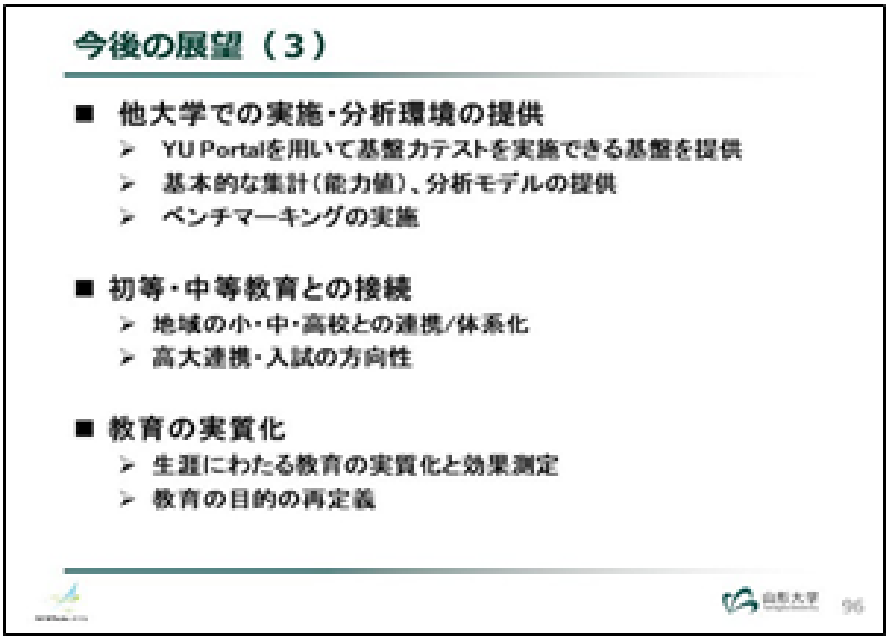


もう一つ、重要なポイントなんですけれども、今回学部だけでやっただけではないので、一つの学部だけではなくて、横に見ることができる。先ほどカリキュラムのＥの話もありましたけれども、いくつかの違う経路で入学してきた学生さん、違う経路で卒業していく学生さんについても、経時的・歴年的に追いかけることができて、各部局の、学部の、若しくは学科の授業に関して、どういうふうな形で教育効果が上がっているのかというレビューもできるということになります。併せて、カリキュラムの体系化、３つのポリシーの実質化というところにつながっているかということになるわけです。こういうことをやることによって、学部若しくは学科、そして担当している先生方の中で、意識的に、若しくは無意識的に、この結果を見て改善しようとか、この結果を見て「なんでかな」ということを考えるというふうなことが始まってくるというか、実際もう始まっているんですけれども、そういうふうな形で、ようやく先ほどの藤原先生の話で言う、クロージング・ザ・ループというところがちょっと始まりつつあるかなと。足が引っかかりつつあるかなというふうに考えています。

そして、Institutional Effectiveness ですかね。という形で教育効果、若しくはその改善の循環プロセスということで定着していくということですね。これ実はかなり前から考えていて、この基盤力テストは先ほどの安田先生のお話にもありましたけども、７年ぐらい前からもう既に構想としてあって準備してきたんですけれども、最終的というか、ある途中段階で、他大学でも実施できるということで、アプリケーションでも環境というのを準備してきたという、そういう部分があります。これを実施すると。山形大学に関して、1700 人全員で実施しています。そしてあまり大きい大学ではないんですけれども、すべての学部ですね。理系・文系総合大学として偏りなく学科が存在するということがありますので、山形大学というのは国立大学の中ではレベル高い方ではないんですけども、その中でも逆にそれが良いほうに働いて、ベンチマークとして使うことができます。ということになるわけです。

そうすると何がいいかと言いますと、基盤力テストを各大学で、もししたいということがあれば実施できるということです。大きなポイントとしては、山形大学は全学でやって

いますが、もし御参加したいという大学様だったり先生がいらっしゃったら、自分のクラスだけという形でも始めることができるというわけです。つまり自分の授業、40 人だったり、50 人だったりというような場合でも、実際にテストすることができて、さらにベンチマーキングの基準として、山形大学のデータがそういうふうな形で実施できるということもあります。ここで一番大事なポイントというのは、なぜ全学でやらなくていいようにしているかと言うと、当然やるためには極めて高い政治力が必要になると。すべての先生方納得させないといけないというところがありますので、自分だったら大丈夫だけど、納得しない先生がたくさんいらっしゃったら出来ないねということがないように、こういう形で実施できるようにということですね。



もう一つ重要安ポイントとして、初等・中等教育との接続というところも今後考えていきたいと思います。これも実は以前からいろいろ議論はしているんですけれども、地域の、特に高校ですね。――との連携をして、このような評価基準というのを体系化していくことができるんだということがあります。特に地域の高校はなかなか進学率が高まらないとか、なかなか良い大学に行けないとかいうふうな状況が進んでいます。そういうこともあって、山形大学としても地域にある大学として、初等・中等教育も改善ということに取り組んでいく必要があると思います。大学でどういうふうな教育を行っているか。若しくはどういうふうな能力を期待しているのかというのも、高校に提示していくことができるかというのがここでの大きなポイントになっています。それが結局、やはり入試の方向性であったり、高大連携であったりというところの一番大きなポイントになってくるかと思います。

これは 18 歳人口の減少というところもあるんですけれども、それは大きな話だと思うんですけれども、もう少し大きく見て、日本の大学教育の今後をどうしたいのかと。単に入試というのは、勉強できる学生を集めたいのか。それとも大学が期待しているような、成長してくれるような学生を集めたいのか。そういうところまで戦略性を持って、入試方法であったり、入試対応であったりということをしていく必要があるのではないかなと思います。さらに教育の実質化ということで、生涯にわたる実質化、効果測定ということを

行っていきたいと考えています。これはそれこそ将来が分からない時代ということで、ずっと将来分からなかったと思うんですけれども、常にそういうふうな将来がしっかり分かってるよというふうな幻想がなくなった時代だというふうにとらえていますけれども、特に常に自分で学んでいく能力というのをどうやってつけていくのかというところまで戻ってくるかと思います。

ここでやっと私が言いたいことが戻ってくるんですけれども、結局さっきのサバ缶を作るような工場みたいな大学にしたいというわけではなくて、自分で学生さんが社会人になってからも学ぶと。自分で何を学ぶのかということを自分で考えて学ぶというところにやっと戻ってこれるのかなと。つまり昔の古き良き大学でしょうか。そういうところまで戻してくるために、やはり一度はこういうふうな効果検証を大学が謙虚になってやるときが来ているんじゃないかというふうに思っています。その上で初めて学生若しくはそれぞれの人々が自分で学ぶということについて、もう一度再定義するときが来るんじゃないかなというふうに思っています。

というわけで、いくつかですね、参考文献という形で置いていますけれども、日本の大学、こういうところで話す機会も比較的多いんですが、なるべく我々としては山形大学の成果を世界に発信したいので、ウェブページだけではなくて、国際会議でかなり細かく発表して、比較的いろんなお褒めの言葉だったり、関心を持っていただいたりということをしています。その辺の資料も、山形大学の OIRE のウェブページに載せていますので、もし御興味があれば、そちらの方を参照していただければなと思います。以上でちょっと私のふわふわした話だったと思うんですけれども、ここで終わりとさせていただきます。どうもありがとうございました。

○司会

千代先生、ありがとうございました。では、ただ今の報告に関しまして、特に後半の他大学様との協力なども含めて、御質問がございましたらお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。はい。この後、総合討論の時間を取りますので、で

はいったんここで休憩を 15 分ほど取らせていただきます。14 時 10 分から総合討論を再開したいと思いますので、いったん休憩にしたいと思います。どうもありがとうございました。